

研究拠点形成事業
平成26年度 実施報告書
B.アジア・アフリカ学術基盤形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	人間文化研究機構 国立民族学博物館
(タイ) 拠点機関：	ガンチャナピセーク国立博物館
(ミャンマー) 拠点機関：	ミャンマー文化省国立博物館
(モンゴル) 拠点機関：	モンゴル科学技術大学

2. 研究交流課題名

(和文)： アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流
(交流分野：博物館学)

(英文)： New Horizons in Asian Museums and Museology
(交流分野：Museology)

研究交流課題に係るホームページ：[http:// www.r.minpaku.ac.jp/sonoda/](http://www.r.minpaku.ac.jp/sonoda/)

3. 採用期間

平成24年4月1日 ～ 平成27年3月31日
(3 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：人間文化研究機構 国立民族学博物館

実施組織代表者(所属部局・職・氏名)：国立民族学博物館・館長・須藤健一

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：国立民族学博物館・教授・園田直子

協力機関：

事務組織：国立民族学博物館 管理部 研究協力課国際協力係、財務課経理係・調達係

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：タイ

拠点機関：(英文) Kanchanaphisek National Museum

(和文) ガンチャナピセーク国立博物館

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Kanchanaphisek National Museum・
Director・INCHERDCHAI Jarunee

協力機関：(英文) Chiang Mai National Museum

(和文) チェンマイ国立博物館

(英文) The Office of the National Museums, Fine Arts Department

(和文) 文化省芸術局博物館課

(英文) Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre

(和文) シリントーン人類学センター

(2) 国名：ミャンマー

拠点機関：(英文) Myanmar National Museum, Ministry of Culture

(和文) ミャンマー文化省国立博物館

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Myanmar National Museum, Ministry of Culture・Expertise・NU Mra Zan

協力機関：(英文) Nay Pyidaw National Museum, Ministry of Culture

(和文) ネーピードー文化省国立博物館

(3) 国名：モンゴル

拠点機関：(英文) Mongolian National University of Science and Technology

(和文) モンゴル科学技術大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) School of Humanity・Professor・Ichinkhorloo LKHAGVASUREN

協力機関：(英文) Center for Cultural Heritage of Mongolia

(和文) 文化財保存センター

5. 研究交流目標

5-1. 全期間を通じた研究交流目標

博物館は、単に資料を収集・保存・展示するだけの場ではなく、特に途上国においては国家・民族としてのアイデンティティを確立する場であり、また観光振興の要として、教育施設として、あるいは戦乱・災害からの復興の拠点としての役割を持つ。そのため、アジア・アフリカにおける自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成は、緊急の課題となっている。

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立民族学博物館は1994年度より、途上国を対象に、博物館学ならびに博物館の実践的技術を学ぶ研修を実施してきた。研修に参加したアジアの国ぐにのうち、タイ、ミャンマー、モンゴルでは、日本で研修を受けた人びとの間で国内ネットワークが構築されており、自国の文化的・社会的背景に即した博物館学・博物館研究を模索しているところである。

本事業では、国立民族学博物館が今までに培ったネットワークの新たな展開として、若手の人材育成を視野に入れながら、博物館学を中心とした実践的な学術基盤の形成をはかる。タイ、ミャンマー、モンゴルで博物館学の教育研究を行い、博物館活動や人材育成の中核をになう専門家とともに、日本をふくむ4カ国での博物館学の研究成果や博物館活動の事例を共有し、共通の基盤をつくる。そのうえで、従来の受動的立場（「展示される」側）から主体的立場（「展示する」側）へと変容する、現代のアジアにおける博物館の潮流を明らかにし、アジア独自の博物館学・博物館研究のモデルをつくりあげる。

本事業の最終目標は、今までの欧米主流の博物館学・博物館研究とは異なる、アジアの文化的・社会的背景に即した独自の博物館学・博物館研究が創出されることであり、そのうえで、タイ、ミャンマー、モンゴルにおいて自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成の研究基盤が形成されることである。

5-2. 平成26年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

最終年度である平成26年度は、日本とタイにおける博物館・博物館学の比較研究と研究交流を目的に、タイで共同研究会と公開セミナーを開催する。共同研究会と公開セミナーでは、日本とタイ両国の博物館・博物館学の専門家や教育研究者が発表を行い、互いに研究成果や実践事例を共有しあう、新たな研究協力体制を構築する。公開セミナーには、博物館・博物館学の専門家や教育研究者だけでなく、次世代をになう若手の人びとにも参加をよびかけ、タイ国内の研究協力体制の構築強化に寄与する。

3年にわたる本プロジェクトでは、開催国の博物館・博物館学の専門家だけでなく、プロジェクトに参画している国（タイ、モンゴル、ミャンマー）のコーディネーターが参加し討論に加わることで、情報と知見の共有をはかってきた。これにより、日本と各国間の双方向交流にとどまらず、日本を含む4カ国間での研究協力体制がより一層強固になることが期待できる。平成27年には、別経費を充当して、3年間の共同研究の集大成となる国際シンポジウムを、日本側拠点機関である国立民族学博物館で開催する予定である。

<学術的観点>

平成26年度の共同研究会は、タイのガンチャナピセーク国立博物館で開催する。同館は、タイ国内すべての国立博物館の中央収蔵施設と位置づけられている機関である。ガンチャナピセーク国立博物館の大規模な収蔵施設を視察するとともに、資料の保存と活用の両立という、保存科学の命題への解決の一助として「予防保存」をテーマにした共同研究会を開催し、①持続的な資料保存と収蔵、②緊急時の資料保存と防災、このふたつの観点から考察を進める。

<若手研究者育成>

公開セミナーは、本事業に関わる研究者にとどまらず、タイ全国の博物館や大学関連部局の若手人材を対象に開催する。博物館の社会的意義という最も根源的な問題について、展示・教育、そして地域との関わりという側面から、本事業に関連する研究者、そして次世代の研究者が学術的観点から議論する場を設け、若手研究者育成に寄与する。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

平成26年度のタイにおける共同研究・公開セミナーの開催をもって、当初の予定どおり、タイ、モンゴル、ミャンマー、これら3カ国における博物館・博物館学の比較研究と研究交流が完了する。これにより、本事業終了後、参画した研究者が共同で、アジア独自の博物館学・博物館研究を創出するための強固な共通基盤を形成することができる。

6. 平成26年度研究交流成果

(交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。)

6-1 研究協力体制の構築状況

平成24年度のモンゴル、平成25年度のミャンマーに続き、平成26年度はタイで共同研究会とセミナーを開催した。共同研究会とセミナーでは、日本とタイ両国の博物館・博物館学の専門家や教育研究者が発表を行うことで、互いに研究成果や実践事例を共有しあう新たな研究協力体制を構築することができた。共同研究会と公開セミナーを通じて、日本12名、ミャンマー1名、モンゴル1名、そしてタイから述べ120名の参加者があり、活発な質疑応答、情報共有、意見交換をおこなった。タイでの共同研究会と公開セミナーを通じて、タイ国内の博物館・博物館学の専門家や教育研究者とともに、タイにおける博物館ネットワーク強化に貢献できたと考える。

6-2 学術面の成果

タイでの共同研究会と公開セミナーには、ミャンマーとモンゴルのコーディネーターも参加し、討論に加わることで情報と知見の共有をはかった。これにより、本事業終了後、参画した研究者が共同でアジア独自の博物館学・博物館研究を創出するための共通基盤がさらに強固になった。

モンゴル、ミャンマー、そしてタイでの共同研究会と公開セミナーの成果は、それぞれ刊行物としてとりまとめ、本事業へ参画した研究者にとどまらず、ひろく当該国の博物館関係者、若手研究者や学生が活用できるようにした。モンゴルでの成果は2014年11月に『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」—モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』(日本語・モンゴル語)として、モンゴル国立文化遺産センターから刊行した。ミャンマーでの成果は2015年2月に *Asian Museums and Museology 2013 – International Research Meeting on Museology in Myanmar* – (Senri Ethnological Reports 125) として、タイでの成果は2015年3月に *Asian Museums and Museology 2014 – International Workshop on Museology in Thailand* – (Senri Ethnological Reports 129) として、国立民族学博物館から刊行した。いずれも、最新の博物館事情が分かる書であるとともに、博物館活動・研究の参考書ともなる。それぞれ相手国に100部ずつ配布し、社会還元した。刊行物発行により、アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための基盤をさらにかためることができた。

6-3 若手研究者育成

公開セミナーは、本事業に関わる研究者だけでなく、タイ各地の博物館や大学関連部局の人材を対象に開催した。そのため博物館学の学生も含めた、多くの若手の研究者の参加があった。博物館の社会的意義という根源的な問題について、展示・教育、そして地域との関わりという側面から、本事業に関連する研究者、そして次世代の研究者が学術的観点から議論する場となり、若手研究者育成に寄与した。

6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

今回タイで開催した共同研究会と公開セミナーが契機となり、日本とタイ間のこれまでの研究交流の絆が一層強まった。今後、タイで博物館・博物館学に係わる研究や活動を進めるとともに、若手人材育成をしていくうえで、日本側が協力していくことが再確認された。本プロジェクトの日本側拠点機関である国立民族学博物館は、滋賀県立琵琶湖博物館とともに、平成 27 年度から新たに 3 年計画で国際協力機構（JICA）・課題別研修「博物館とコミュニティ開発」コースを開催することが決定しており、国際的な人材育成にひきつづき貢献していく。

6-5 今後の課題・問題点

タイ、モンゴル、ミャンマーは、それぞれ博物館・博物館学がおかれている歴史的・社会的・文化的背景が異なる。初年度の平成 24 年度はモンゴル、平成 25 年度はミャンマー、そして最終年度はタイで共同研究会・セミナーを開催し、各国の活発な博物館活動の事例を共有し、それぞれの国の経験と知見を分かち合うことが出来たのは大きな成果であった。

これらの経験と知見をふまえ、平成 27 年 2 月 21 日～22 日、別経費を充当して、日本側拠点機関である国立民族学博物館にて、国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」を開催した。シンポジウムは、3 年間の本事業の成果発表であると同時に、国立民族学博物館が 20 年以上継続している博物館・博物館学に関する国際貢献、人材育成の集大成のひとつと位置づけることができる。アジアから世界へ、博物館学・博物館に関する研究成果・活動事例を発信し、欧米が主軸になりがちな博物館学・博物館研究に新たな切り口をひらく契機となるシンポジウムとなった。その成果は、今後、速やかに刊行する予定である。

6-6 本研究交流事業により発表された論文

平成 26 年度論文総数 54 本

相手国参加研究者との共著 5 本

（※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。）

（※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。）

7. 平成26年度研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成26年度
研究課題名	(和文) 日本とタイにおける博物館・博物館学の比較研究 (英文) Comparative studies in museums and museology: Japan and Thailand				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 園田直子・国立民族学博物館・教授 (英文) Naoko SONODA・National Museum of Ethnology・Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) INCHERDCHAI Jarunee・Kanchanaphisek National Museum・Director				
参加者数	日本側参加者数	12名			
	(タイ) 側参加者数	4名			
	(ミャンマー) 側参加者数	1名			
	(モンゴル) 側参加者数	1名			
26年度の研究 交流活動	<p>平成26年度は、日本とタイにおける博物館・博物館学の比較研究と研究交流を目的とした国際共同研究会を、同国の国立博物館の中央収蔵施設であるガンチャナピセーク国立博物館で開催した。大規模収蔵施設を視察した後、資料の保存と活用の両立という保存科学の命題への解決の一助として「予防保存」をテーマにした共同研究会を開催し、①持続的な資料保存と収蔵、②緊急時の資料保存と防災、このふたつの観点から、日本とタイ両国の研究者や専門家が研究成果や博物館活動の事例報告を発表した。ディスカッションでは、テーマごとに、日本、タイ、ミャンマー、モンゴル、それぞれの国の博物館事情や文化的・社会的背景をもとにディスカッションを行い、情報と知見の共有をはかった。</p> <p>共同研究会の一環として、タイ国内の博物館・文化施設の視察を行い、研究者ネットワークの構築と共通の基盤形成をはかった。</p>				
26年度の研究 交流活動から得 られた成果	<p>タイでの共同研究会開催により、日本とタイ間の博物館学・博物館に関わる研究交流が深化され、互いに研究成果や実践事例を共有しあう、新たな研究協力体制を構築できた。</p> <p>共同研究会にミャンマーとモンゴルのコーディネーターが参画することで、情報と知見の共有がはかれるとともに、4か国間のネットワークの基礎がより強固になった。これにより、初年度のモンゴル、翌年度のミャンマー、そして最終年度のタイでの共同研究会までを有機的に連携させることができた。また、年度末に日本で開催した国際シンポジウムにおいて、参画した研究者が共同で、アジア独自の博物館学・博物館研究を創出するための共通基盤ができた。</p>				

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業 公開セミナー 「博物館の社会的役割」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program Public Seminar “Social Roles of the Museum”
開催期間	平成 26 年 8 月 26 日 ~ 平成 26 年 8 月 26 日 (1 日間)
開催地(国名、都市名、 会場名)	(和文) タイ、バンコク国立博物館
	(英文) Thailand, Bangkok National Museum
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 園田直子・国立民族学博物館・教授
	(英文) Naoko SONODA・National Museum of Ethnology・ Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) INCHERDCHAI Jarunee・Kanchanaphisek National Museum・Director

参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 (タイ)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	12/ 58
	B.	
タイ 〈人／人日〉	A.	4/ 4
	B.	87/ 87
ミャンマー	A.	1/ 5
	B.	
モンゴル	A.	1/ 5
	B.	
合計 〈人／人日〉	A.	18/ 72
	B.	87/ 87

※R-1 の共同研究にてタイ出張を行い、セミナーはその中の 1 日を当てる。

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本セミナーは、本事業に関わる研究者のみならず、タイの博物館と大学の関連部局の若手人材を対象とする公開セミナーであり、次世代育成という目標を併せ持つ。</p> <p>現在、タイで中心となって活躍している博物館・博物館学の専門家や研究者とともに、博物館の社会的役割というもっとも根源的な問題について学術的観点から議論することで、次世代をになう若手の研究者に新たな知見と視点を提供する。</p>		
<p>セミナーの成果</p>	<p>本公開セミナーにより、博物館の社会的意義の重要性が、本事業に関わる研究者間のみならず、次世代研究者にも広く普及、共有された。博物館の社会的意義という根源的な問題について、展示・教育、そして地域との関わりという側面から議論する場となり、若手研究者育成に寄与した。</p> <p>共同研究会と公開セミナー全体を通じて、日本 12 名、ミャンマー 1 名、モンゴル 1 名、そしてタイからは述べ 120 名もの参加者があり、活発な質疑応答、情報共有、意見交換をおこなった。</p> <p>本公開セミナーは、タイにおいて、経済発展のうねりのなかで見過ごされがちな文化的側面、博物館や文化遺産の保護の重要性を再確認する契機となったと期待できる。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>タイ、カンチャナピセーク国立博物館・館長の INCHERDCHAI Jarunee、日本側は国立民族学博物館の平井京之介（タイ研究）、園田直子（本事業コーディネーター）が協力して、企画運営した。</p>		
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容</p> <p>通訳謝金</p> <p>外国旅費</p> <p>会議費</p> <p>消費税</p> <p>合計</p>	<p>金額</p> <p>80,491 円</p> <p>46,953 円</p> <p>251,540 円</p> <p>30,318 円</p> <p>409,302 円</p>
	<p>タイ側</p>	<p>内容</p> <p>会場提供</p>	

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣期間	用務・目的等
滋賀県立琵琶湖博物館・専門学芸員・楠岡泰	日本・大阪・国立民族学博物館	2014年4月	タイでの共同研究会・セミナーに関する打ち合わせ
国立民族学博物館・名誉教授・森田恒之	日本・大阪・国立民族学博物館	2014年4月	タイでの共同研究会・セミナーに関する打ち合わせ
国立民族学博物館・名誉教授・小林繁樹	日本・大阪・国立民族学博物館	2015年2月	日本での国際シンポジウム参加
国立民族学博物館・名誉教授・森田恒之	日本・大阪・国立民族学博物館	2015年2月	日本での国際シンポジウム参加

8. 平成26年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	四半期	日本	タイ	ミャンマー	モンゴル	合計
日本	1		()	()	()	0/0 (0/0)
	2		11/53 (1/5)	()	()	11/53 (1/5)
	3		()	()	()	0/0 (0/0)
	4		()	()	()	0/0 (0/0)
	計		11/53 (1/5)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	11/53 (1/5)
タイ	1	()		()	()	0/0 (0/0)
	2	()		()	()	0/0 (0/0)
	3	()		()	()	0/0 (0/0)
	4	(2/12)		()	()	0/0 (2/12)
	計	0/0 (2/12)		0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (2/12)
ミャンマー	1	()	()		()	0/0 (0/0)
	2	()	1/4 ()		()	1/4 (0/0)
	3	()	()		()	0/0 (0/0)
	4	(2/12)	()		()	0/0 (2/12)
	計	0/0 (2/12)	1/4 (0/0)		0/0 (0/0)	1/4 (2/12)
モンゴル	1	()	()	()		0/0 (0/0)
	2	()	1/5 ()	()		1/5 (0/0)
	3	()	()	()		0/0 (0/0)
	4	(2/12)	()	()		0/0 (2/12)
	計	0/0 (2/12)	1/5 (0/0)	0/0 (0/0)		1/5 (2/12)
合計	1	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
	2	0/0 (0/0)	13/62 (1/5)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	13/62 (1/5)
	3	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
	4	0/0 (6/36)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (6/36)
	計	0/0 (6/36)	13/62 (1/5)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	13/62 (7/41)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

8-2 国内での交流実績

1	2	3	4	合計
2/2 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/7 (4/8)	4/9 (4/8)

9. 平成26年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	77,180	
	外国旅費	2,327,123	
	謝金	217,291	
	備品・消耗品 購入費	10,063	
	その他の経費	967,268	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	226,075	
	計	3,825,000	
業務委託手数料		382,500	
合 計		4,207,500	